笛　川　中　学　校

主体的に学習に取り組む生徒の育成
～ 一人ひとりの学習意欲の向上をめざして ～

Ⅰ　主題設定の理由

1 本校の学校経営方針から
2 学習指導要領から
3 生徒の生活実態から

平成 20 年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙より次の内容が明らかになった。本校は「朝食を毎日食べる」生徒数が全国平均よりかなり高く，

食べている　笛川中　８３．７％　全国　８１．１％

その他の項目もおおむね良好であり，生活習慣が安定している家庭が多い。

一方

「家で学校の授業の復習をしていますか」

あまりしていない	笛川中	４０．８％	全国	３４．７％
全くしていない	笛川中	２０．４％	全国	２５．５％

このことから，生徒は学校の授業を頼りにしていることがわかる。そのため，よりよい授業の工夫が求められている。

以上のように，本校の学校教育目標，学習指導要領の目標及び本校の生徒の生活実態を考慮した上で，生徒により高い教育目標を達成させるためには本主題がふさわしいと考える。

Ⅱ　研究の内容と方法

1　全体と部会での研究

全体研究会
教科指導研究会　（国・数・英研究部会）(職員全員がそれぞれいずれかに所属)
学年指導研究会　（職員全員がそれぞれ１学年～３学年のいずれかに所属）

（１）教科指導研究会

ア全国学力調査の結果分析
全国学力調査（国・数）等の結果を分析し，授業改善に取り組む。

イ教科指導研究会（国・数・英研究部会）に所属し，研究の深化をはかる。

ウ基礎・基本の確実な定着を目指し，指導方法の内容を確認し，そのための指導計画を明らかにする。

（２）学年指導研究会

ア学年ごとに学習規律と学習習慣を確立できるようにする。

イ生徒の生活実態を把握する。(生活アンケートを通して)

３年生が実施した生活アンケートを１，２年生も実施する。また３年生が実施した生活アンケートも本校で集計し，昨年度のアンケート結果と今年度の各学年アンケート結果を比較する。その結果，生活習慣の改善を含め生徒につけさせたい力をそれぞれの学年指導研究会で目標を設定し，取り組む。また平成１９年度の「全国学力・学習状況調査」結果から「学習状況」と学力との相関関係が分析されているので，学校便りやＰＴＡ部会等を利用して保護者へ本校の傾向を提示し，家庭学習，生活習慣，意欲付けの面で啓発を行うなど個別指導にも役立てる。

Ⅲ　成果と課題

１　成果

（１）【研究の方向性について】「学習状況調査」を実施，分析したことで，生徒の実態をふまえた研究テーマを設定できた。日常生活と学習との相関関係があるため，教科研究部会，学年研究部会それぞれが補填し合う意味で研究に効果的だった。

（２）【全国学力・学習状況調査について】「全国学力・学習状況調査」（国数）は毎年３年生が実施するため，単純にデータの比較はできない。しかし，教科部会での前年度の課題の把握と今年度の「全国学力・学習状況調査」結果のデータ分析を行うことで，本校の生徒が苦手としている領域が明確になった。その領域に関して，１・２年生の段階から意識的な指導を行うことが，学力向上のために効果的だということが分かった。このことは，すぐに実践できる取り組みとして他校への提案になると考える。

２　課題

（１）各部会の活動内容を交換し合い，共通する課題を明確にして取り組んだり，他教科との連携をより積極的に図ろうなどの意見がある。

（２）学習意欲に関し，改善しつつあるが，学ぶ意欲が足りない生徒が見られる。
　学習意欲を向上させるため，教材・教具の工夫・活用など教材研究を深めることと指導方法などについて研究を続けることが必要である。また学校では，自主学習ノートへの取り組みや学習計画作りなどに取り組んだが，家庭には生活環境の改善を含め，それぞれの家庭なりの「学習への動機付け」を行うように呼びかけている。

（３）学年研究部会では，各学年の実態に沿って，実践を行っているが，生徒の実態にひらきが見られる。学年間の実践や研究の成果を共有することが難しいという意見があるため，管理職を含め，全校一丸となって，教師による，あるいは学年間の働きかけ（相互作用）をより効果的に活用しようと考えている。進級の節目や，生徒会の新旧引き継ぎ，生徒会行事への取り組みを通して，集団の力の向上を目指している。

（研究主任　古屋浩紀）